

## 音源の比較試聴(44)

### ―バッハ無伴奏ヴァイオリンソナタ&パルティータ―

#### 1. 始めに

前報(43)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

#### 2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも延べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じ曲のアナログ盤と CD と STAGE+からの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

ドイツグラモフォン 483 4826

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ  
ナタン・ミルシュテイン (ヴァイオリン)

CD は下記を使用します。

ドイツグラモフォン UCCG-9719/20

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ  
ヘンリク・シェリング (ヴァイオリン)

ドイッチェシャルプラッテン TKCC-20027

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ  
カール・ズスケ (ヴァイオリン)

DECCA UCCD-9823/24

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ  
アルトゥール・グルミヨー (ヴァイオリン)

配信は STAGE+から上記と同一の曲を選択します。

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ  
ルノー・カプソン (ヴァイオリン)

バッハ 無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ  
シュロニモ・ミンツ (ヴァイオリン)

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

CD

EMT981→TruPhase(B)→TruPhase(A)

STAGE+

ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

### 3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レーベルに対応したイコライザー特性で聴いていきます。

曲数が多いので無伴奏パルティータ 2 番のシャコンヌで比較していきます。

アナログのミルシュテイン盤は、1975 年の録音で、ミルシュテインの弾くストラディヴァリウスが、これぞアナログの神髄といったかたちで、よく歌います。

CD のシェリングの演奏は、1967 年の録音で、いかにもガルネリらしい、深い滋味のある演奏です。

ズスケの演奏は、録音年代は不明ですが、CD 化は 1993 年と記載があります。使用楽器は不明ですが、澄んだ音で丁寧に弾いているのが分かります。

グルミヨの演奏は、1960 年の録音ですが、年代の古さを感じさせないアナログライクな音質でありながら、重音の表現もしっかりしており、切れの良い演奏です。グルミヨは年代によって機種を替えているようで、1960 年頃はストラディヴァリウスを使用していたという情報があります。

STAGE+ の配信のカプソンの演奏は、STAGE+ を楽しむ(347) で報告のとおり、カプソンが現在使用しているガルネリの音色を十分に活かした、しみじみと聴かせる演奏で、この曲の現代の演奏のお手本のようなようです。

ミンツの演奏は、ミンツが現在使用しているのは、ミケランジェロ・ベルゴンツィのようですが、重厚な音色で複雑な重音や倍音の表現が特徴です。

### 4. まとめ

アナログ再生と STAGE+ からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくなっており、収録年代や収録環境の違いもよく分かり、収録年代の古いものも古さを感じさせず、すべて演奏のスタイルや使用楽器の音色も十分に把握できます。

以上